

- 15) 山崎元靖, 堀進悟・他：理学療法士等に対する AED トレーニングの効果. 日救急医学会誌 25 : 176 - 177, 2004.
- 16) 源河朝広：循環器救急医療における標準的な心肺蘇生法 AHA/ACLS について. Heart View 9 (13) : 75 - 81, 2005.
- 17) 渡辺淳：我が国における心臓突然死の実態と原因. 循環器科 58 (5) : 439 - 445, 2005.

【文献抄録】

高齢者の転倒リスクと転倒に対する「個別転倒予防プログラム」の効果： 無作為化対照試験

Stephen R. Lord, PhD, et al: The Effect of an Individualized Fall Prevention Program on Fall Risk and Falls in Older People: A Randomized, Controlled Trial, JAGS53:1296-1304, 2005

高齢者を対象とした、運動機能、視覚機能、カウンセリングをふくめた転倒予防プログラムが転倒リスクと実際の転倒を予防できたかどうかを調べるため、12ヶ月間の介入による無作為化対照試験(Randomized Controlled Trial)を実施した。

実施機関はオーストラリア、シドニー、ノース・ショア病院の転倒クリニックである。

被験者として健康保険会社データベースから年齢75歳以上の620名が選出され、介入は、集中介入群(EIG;運動機能、視覚機能、感覚機能に対して個人介入を受けたグループ)、最小介入群(MIG;簡単なアドバイスを受けたグループ)、対照群(CG;全く介入を受けていないグループ)の3群に分けて行なわれた。

各介入群では視覚機能、姿勢動揺、協調性、反応時間、下肢筋力、座位一立位(sit-to-stand)パフォーマンス、physiological profile assessment (PPA) 転倒リスク・スコアの7項目を測定した。

6ヶ月間の追跡調査の結果、対照群よりも集中介入群でPPA転倒リスク・スコアの得点が明らかに低かった。種々の介入を受けた集中介入群では、膝関節屈曲筋力は増大し、座位一立位パフォーマンスに要する時間が短縮し、視覚の鋭敏さとコントラストに対する感受性の検査においても明らかな向上を示した。しかし、バランス能力の変化はみられなかった。転倒率と転倒による受傷率に関しては、各群間に有意差は認められなかった。

個人介入プログラムにより、転倒に関するいくつかの危険因子の改善は認められたが、転倒を防止できるというわけではない。転倒に対する効果が十分でないということは、転倒リスク群に対する介入目的の不十分さが反映されているといえる。

(日本医療福祉専門学校 青山満喜)